

10. 景観について

07.05.25

最近、各自治体では、中央駅周辺の景観を改善しようとか、メインストリートに乱立する野外広告塔を規制しようとかいうことで、行政サイドが動き出している。私は、規制の議論もさることながら、もっと身近な生活環境を良くするといった基本に戻ったアプローチをすべきと主張したい。

富山はいうに及ばずいわゆる地方都市においては、街の活性化を身勝手に進めることが無秩序な街並み景観を形成し(広告看板乱立など)大きな問題となっている。この種の問題では、民活として身勝手を奨励するかのような活力を期待するところが問題をこじらせているばかりか、街を単に外見だけの見え方と見せ方で評価しようといううすべりの対応も災いしており、街の生活観からかもし出される社会性や公共性の観点がどう定着させていくのかという根源がいつもなおざりにされている。

では、どうするのか。それは、景観が市民生活の営みの一断面であるという観点にたつて、生活の営みにおける問題をひとつひとつ解決していくことしかないであろう。私は、以下のような方策が必要と考えている。

(1). 身のまわりから社会性の熟成を図る。自分の住まい環境が周りの環境を構成しているという観点をもっと持つようにしたい。例えば使わなくなった家具や製品など生活で不要になった物を無造作に自宅庭に置いている。プランターで花いっぱいにするのも必要であるが、美的感性がにぶらないようにするためにも、そうしたゴミのようなものを如何に片付けるかという社会性や感性を項目(5)の教育とリンクさせて熟成したいものである。

(2). 地域の景観を守り育てる。例えば、街路樹ひとつとっても落ち葉が邪魔だから枝を切ってしまうといった声があれば惜しげもなく切ってしまう。都会の小さな公園は無常にも枝だけの木が立っている。我らの生活空間をいかに造り守っていくのかが問われている。生命体は人間だけではないことを、地域づくりや教育の観点からアプローチするしかないであろう。

(3). 街では生活の様相をありのままにみせる。街の隅々までが子供や大人の居場所となるようにすることにより、生活の一断面の景観がますます人間らしくなる。外見の見え方・見せ方ばかりではなく、人間らしい声の聞き方・聞こえ方で街を彩りたいものである。

(4). 市民参加を実効的なものにする。市民参加について、パブリックコメントを募集したり、アイデアを募集したり、ヒアリングを開催したりしていれば、市民参加が実効したといって満足してしまう感がある。そろそろ、フィードバックの方法を抜本的に考えてもいいではなからうか。現場において市民とのコミュニケーションをどしどし図ることこそ今日的課題である。

(5). 感性教育をすすめる。景観教育の背景にあるのは、人間の感受性の育成にある。これが今危機にある。初等中等教育では、図画工作や音楽の時間がどんどん削られ、今中学では、美術と音楽を選択科目に使用などと中教審で議論されているとも聞く。その一方では、総合学習として街づくりや景観などといっても、木に竹を接いだような話であり、根本的には解決は程遠いといえる。身のまわりから大自然や人工環境(都市環境)までをトータルに扱って、人間らしい感性を育成するために初等中等教育 機関や地域と連携して教育を進めていくべきである。

まとめとして、一言述べる。(どこの自治体にも設置されている)景観の専門的な委員会は技術的な検討を旨としているのかもしれないが、いまだ少しヒューマンアプローチもいるのではないかと思う。街並み外見の見え方ではなく見せ方でもない。ごく普通に生活をお互いに視覚的にコミュニケーションしておけば十分といえる。

富山らしい景観とは、富山という地における富山人の生き方や営みそのものであり、もっといえば育んだ文化そのものともいえる。これをもって富山発の景観形成の推進としたいものである。